

第28回夏期福音特別集会(4)(梅ヶ島)

新天新地

——イザヤ書第65章、66章——

1981年8月23日

小池辰雄

神の本願 神の歴史(幕屋) 図 召団讃歌B6「今はいつこで」 新天新地の大希望 新天新地を現在化 幕屋の構造 新天新地は現在化する 喜び楽しむ 御霊の実証 自分自身を棄てる 本当のところを持つているか 霊法人 天地両極を持つ 神さまのつかみかかりに対して パツと応える 永遠の乳房 全世界の民を天のエルサレムに招く 新天新地を己のうちに持つ 永遠の女性 起きよ日本 祈り

【イザヤ65】

1 我はわれを求めざりしものに問いもとめられ、我をたずねざりしものに見出され、わが名をよばざりし国にわれ曰らく、われは此にあり我はここに在りと。2 善からぬ途をあゆみおのが思念にしたがう悖れる民をひねもす手をのべて招けり。3 この民はまのあたり恒にわが怒をひき、園のうちに犠牲をささげ、瓦の壇にて香をたき、4 墓のあいだにすわり隠密なる処にやどり、猪の肉をくらい憎むべきものの羹をその器皿にもりて、5 人にいう、なんじ其処にたちて我にちかづくなかれそは我なんじよりも聖しと。彼らはわが鼻のけむり終日もゆる火なり。6 視よこの事わが前にしるされたり。われ黙さずして報いかえすべし。必ずかれらの懷中に報いかえすべし。7 エホバはい給わく、なんじらの邪曲となんじらが列祖のよこしまとはともに報いかえすべし。かれらは山上にて香をたき岡のうえにて我を汚ししがゆえに我まずその作をはかりてその懷中にかえすべし。

8 エホバ如此いたもう。人ぶどうのなかに汁あるを見ばいわん、これを壊るなかれ福祉その中にあればなりと。我わが僕等のために如此おこないてことごとくは壊らじ。9 ヤコブより一裔をいだし、ユダよりわれ山々をうけつくべき者をいださん。わが撰みたる者はこれをうけつぎ、我がしもべらは彼処にすむべし。10 シヤロンは羊のむれの牧場となり、アコルの谷はうしの群のふす所となりて、我をたずねもとめたるわが民の有とならん。11 然どなんじらエホバを棄て、わがきよき山をわすれ、机をガド(禍福の神)にそなえ、雑合せたる酒をもりてメニ(運命の神)にささぐる者よ、12 われ汝らを剣にわたすべく定めたり。なんじらは皆かがみて屠らるべし。汝等はわが呼びしと



きこたえず、わが語りしとききかず、わが目にあしき事をおこない、わが好まざりし事をえらみたればなり。

13 このゆえに主エホバかく言給う、わが僕等はくらえども汝等はうえ、わが僕等はのめども汝等はかわき、我しもべらは喜べどもなんじらははじ、¹⁴ わが僕等はこころ楽しきによりて歌うたえども汝等はこころ哀きによりて叫び、また靈魂^{たましひ}うれうるによりて泣号^{なきさけ}ぶべし。¹⁵ なんじらが遺名^{のこすな}はわが撰^{えら}みたるものの呪詛^{のろい}の料とならん。主エホバなんじらを殺したまわん。然どおのれの僕等をほかの名をもて呼びたもうべし。¹⁶ 斯るがゆえに地にありて己のために福祉^{さいわい}をねがうものは真実の神にむかいて福祉をもとめ、地にありて誓うものは真実の神をさして誓うべし。さきの困難^{なやみ}は忘れられてわが目よりかくれ失^{うせ}たるに因る。

¹⁷ 視よわれ新しき天とあたらしき地とを創造す。人さきものを記念することなく、之をその心におもひ出^{いづ}ることなし。¹⁸ 然どなんじらわが創造する者によりて永遠にたのしみよろこべ。視よ、われはエルサレムを造りてよろこびとしその民を快樂^{たのしみ}とす。¹⁹ われエルサレムを喜び、わが民をたのしまん。而して泣声^{なみ}とさけぶ声とはふたたびその中にきこえざるべし。²⁰ 日数わずかにして死ぬる嬰兒^{みどりご}といのちの日をみたさざる老人^{としより}とはその中にまたあることなかるべし。百歳にて死ぬるものも尚わかしとせられ、百歳にして死ぬるものを詛^{のろ}れたる罪人^{つみびと}とすべし。²¹ かれら家をたてて之にすみ葡萄園をつくりてその果をくらうべし。²² かれらが建つところにはほかの人すまず、かれらが造るところの果はほかの人くらわず、そはわが民のいのちは樹の命の如く、我がえらみたる者はその手の工^{わざ}ふるびうするとも存^{ながら}うべければなり。²³ かれらの勤勞^{はたらき}はむなしからず、その生むところの者はわざわいにかからず、彼等はエホバの福祉^{さいわい}をたまいしものの裔^こにしてその子輩^{こら}もあい共におる可^べければなり。²⁴ かれらが呼ばざるさきにわれこたえ、彼らが語りおえざるに我きかん。²⁵ 豺狼^{おおかみ}とこひつじと食物をともにし、獅は牛のごとく藁^{わら}をくらい、蛇はちりを糧^{かて}とすべし。斯てわが聖山^{きよきのやま}のいずこにても害^{そこな}うことなく傷^{やぶ}ることなからん。これエホバの聖言^{みことば}なり。

【イザヤ 66】

¹ エホバ如此^{かく}いいたもう。天はわが位、地はわが足台なり。なんじら我がために如何なる家をたてんとするか。又いかなる処^{やすみ}かわが休憩^{やすみ}の場とならん。² エホバ宣^{のたま}給く、我手はあらゆる此等のものを造りてこれらの物ごとごとく成れり。我はただ苦しみまた心をいたため我がことばを畏れおののくものを顧みるなりと。³ 牛をほふるものは人をころす者のごとく、羔^{こひつじ}を犠牲とするも



のは狗いぬをくびりころす者のごとく、祭物そなえものをささぐるものは豕いのしの血をささぐる者のごとく、香をたくものは偶像をほむる者のごとし。彼等はおのが途をえらみその心にくむべき者をたのしみとせり。4 我もまた災禍わざわいをえらびて彼等にあたえ、その懼おそるるところの事を彼らに臨ましめん。そは我よびとき応うるものなく、我かたりしとき聴くことをせざりき。わが目にあしき事をおこない、わが好まざる事をえらみたればなり。

5 なんじらエホバの言をおそれおののく者よエホバの言をきけ。なんじらの兄弟なんじらを憎みなんじらをわが名のために逐出おいだしていう、願くはエホバその栄光をあらわして我等になんじらの歡喜よろこびを見せしめよと。然どかれらは恥をうけん。6 騒乱さわぎみだるるこえ邑まちよりきこえ、声ありて宮よりきこゆ。此はエホバその仇にむくいをなしたもう声なり。

7 シオンは産うみのなやみを知らざるさきに生み、その苦勞くるしみきたらざるさきに男子をうみいだせり。8 誰がかかる事をききしや、誰がかかる類たぐひをみしや。一つの国はただ一日のくるしみにて成るべけんや。一つの国民は一時にうまるべけんや。然どシオンはくるしむ間もなく直ちにその子輩こらをうめり。9 エホバ言い給く、われ産うみにのぞましめしに何いかでうまざらしめんや。なんじの神いいたまわく、我はうましむる者なるにいかで胎たいをとぎさんや。

10 エルサレムを愛するものよ、皆かれとともに喜び、かれの故をもて樂しめ。彼のために悲しめるものよ、皆かれとともに喜びたのしめ。11 そはなんじら乳をすう如くエルサレムの安慰なぐさめをうけて飽くことを得ん。また乳をしぼるごとくその豊かなる榮えをうけておのずから心さわやかならん。12 エホバ如此かくいいたもう。視よ、われ河のごとく彼に平康やすきをあたえ、漲みなぎる流れのごとく彼にもろもろの国の榮えをあたえん。而して汝等これをすい、背におわれ膝におかれて樂しむべし。13 母のその子をなぐさむるごとく我もなんじらを慰めん。なんじらはエルサレムにて安慰なぐさめをうべし。14 なんじら見て心よろこばん。なんじらの骨は若草のさかゆるごとくなるべし。エホバの手はその僕等にあられ、又その仇をばげしく怒りたまわん。

15 視よ、エホバは火の中にあらわれて来りたもう。その車輦みくるまははやちのごとし。烈いきおいしき威勢をもてその怒りをもらし、火のほのおをもてその譴せめをほどこし給わん。16 エホバは火をもて劍をもてよろずの人を刑つみないたまわん。エホバに刺し殺さるるもの多かるべし。17 エホバ宣給く、みずからを潔くしみずからを別はずかちて園にゆき、その中にある木の像にしたがい、豕いのしの肉けがれたる物および鼠ねずみをくらう者はみな共にたえうせん。

18 我かれらの作為わざとかれらの思念おもひとをしれり。時きたらばもろもろの国民くにびと



ともろもろの族^{やから}とをあつめん。彼等きたりてわが栄光をみるべし。19我かれらのなかに一つの休徴^{しるし}をたてて、逃れたる者をもろもろの国すなわち、タルシシ、よく弓をひくプル、ルデおよびトバル、ヤワン又わが声名^{きこえ}をきかずわが栄光をみざる遙かなる諸島^{しまじま}につかわさん。彼等はわが栄光をもろもろの国にのべつたうべし。20エホバいい給う、かれらはイスラエルの子輩がきよき器にそなえものをもりてエホバの家^{いへ}にたずさえきたるが如く、なんじらの兄弟をもろもろの国の中よりたずさえて馬、車、轎^{かこ}、騾^ろ、駱駝^{らくだ}にのらしめ、わが聖山エルサレムにきたらせてエホバの祭物^{そなえもの}とすべし。21エホバいい給う、

我また彼等のうちより人をえらびて祭司とレビ人とせんと。

22エホバ宣給^{のたまわ}く、わが造らんとする新しき天とあたらしき地とわが前にながくとどまる如く、なんじの裔^{すえ}となんじの名はながくとどまらん。23エホバいい給う、新月ごとに安息日^{やすみ}ごとによろずの人わが前にきたりて崇拜^{おがみ}をなさん。24かれら出てわれに逆きたる人の屍^{かばね}をみん。その蛆^{うじ}しなずその火きえず、よろずの人にいみきらわるべし。

●神の本願

今日は言葉が言葉にならない。困ってしまっています。イザヤ書65章1節から入ります。

「我はわれを求めざりしものに問いもとめられ、我をたずねざりしものに見出^{みいだ}され、わが名をよばざりし国にわれ曰^いらく、われは此^{こゝ}にあり我はここに在りと。

素晴らしい句ですね。ヘブライ語の原文で読むと少し違うんですが、まあ大体これでいい。ヘブライ語の原文を読むと、

「私は本当は求めてもらいたかつたんだよ、見いだしてもらいたかつたんだよ」という反語がこの中に含まれている。

「私を求めなかつた者に求められたかつた。私を見いださなかつた者に見いだされなかつた」

というのが、ヘブライ語の本当の気持ちなんです。それを

「求めなかつた者に求められ、たずねなかつた者に見いだされた」

というように、もうひとつそれを不思議な事実に訳していますが、それもまた面白と思う。我々自身が、求めていなかったのに見いだしたという経験もありますから。あるいは、拒んでいたのに、どうしても捕まってしまったというようなことです。どっちみち、神・キリストの本願がかかっていることにおいては同じです。パウロが異邦人に伝道をした。そのパウロの背後にはそのような神の本願がかかっているわけです。

「彼は求めることを知らないから、どうか、お前が行って本当の求めを悟らしてく



れ」

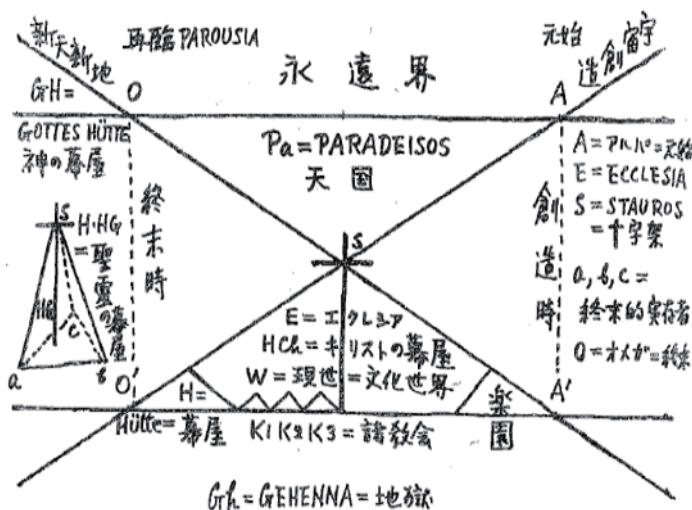
と。また逆に、

「イスラエルの民は、呼んでやったのに逆に去ってしまった」

という嘆きも神さまの側にある。人間の動きは様々なものですから、神さまの方ではやりきれん。けれども、神の追求は最後の日まで続きます。そして、最後の審判がきたときに、なおそれから外れたら第二の死がくることは、黙示録に書いてあるとおりです。

● 神の歴史 (幕屋) 図

曠愛新書の第三巻『沙漠はサフランの如く』(1965 年刊)の「無教会神学論」の所に、この図が書いてある。



天地創造は A'A' で、終末は O'O' です。創造と終末、アルファとオメガです。永遠の世界はここ(上の逆三角形)で、下の幕屋の形をしているがこの世です。十字架の柱が立っている。この世は「悪の幕屋」という言葉が詩篇の中にありますが、しかし、十字架によって支えられている。十字架という門を通してパラダイスに行く。こっちは仮天国です。本天国はこれ(終末)から後にくる。これが新天新地の方だ。同時にここには最後の審判が起きていますから。これが最後の審判の終局点だ。それから永遠の地獄になる。ここはゲヘナと言って仮地獄です。歴史はこちらから進んできている。神の天国は向こうから迫ってきている。

神さまの方ではいつも、

「我ここに在り。ここだ、ここだよ。今ここに居るではないか」

と言っておられる。イスラエルの歴史はこういうように幕屋が張られて、ずっと進んでいく。旧約の世界は幕屋です。十字架からこっちが新約の世界です。こちらはエクレシア(教会)、この世の万人が救われることを、万人救済を望んでいるのが、この逆三角形です。この逆三角形の中には、ここ(旧約界と新約界)に在るだけの人が入っていませんけれども、神の本願はそこにある。そういう神の歴史の中に私たちはいる。小さな考え方はやめた方がいい。地上の生涯は高々百年ですから。我々は永遠の人である。私は自分で時々冗談に

「私は永遠の青年だ」

なんて言っているんだけど。

とにかく、イザヤ書というのは大変な預言書です。イザヤ書 1 章から 66 章まで、全聖書がこの中に入っている。イザヤ書には親しんでくださいよ、驚きますから。読んでいてた



まらん。イザヤ書は66章、聖書は全66巻。イザヤ書というのはちょうど数の上でも聖書を象徴しているようだ。こちらからの祈りでなくて、神さまからの言葉がグーッと嵐の如く、怒濤の如く、天つ風のようにやってくる。

バッハの音楽がその響きを持つている。ベートーベンはかなりこちら側の響きが強い。しかし、ベートーベンも晩年になると完全に天的な響きです。バッハは始めから天的な響きを響かせている。カンタータという歌を日曜日に歌わせて、その後は楽譜を屑カゴに入れてしまう。常に新たに作っていく。奥さんが、屑カゴに入っている紙クズは何だろうと開いてみたら、それがカンタータだった。それでやつとバッハの曲が残ったという。そういう人です。

神さまのつかみかかり、み声、本願の響き、それがイザヤ書でグーッときています。私は旧約ではイザヤ書だけあればいいと思うくらいに、大変な書なんだ。新約の福音書から黙示録に至るまで、イザヤ書の響きがあちこちに出ている。このイザヤという預言者は大変なものです。第一、第二、第三イザヤは、そういう意味で本当に親しんでください。

●召団讃歌B6「今はいつまで」

2 善^{みち}からぬ途^{おもい}をあゆみおのが思念^{おもい}にしたがう悖^{もと}れる民をひねもす手をのべて招^{まね}けり。

それていく者をひねもす手をのべて招いたという、「どうしたんだね」と。私の中にも同じ涙があります。

召団讃歌のB6「今はいつまで」に歌ってある(中山晋平作曲「さすらいの歌」の曲で)。

1 今はいつまで 暮らしておるや

星は移るも 忘れめや

美^はしき想い出 かぎりもあらじ

おみなおのころ 今いつこ

私の集会に列しながら、去っていったご連中に私はエホバの神さまと同じ気持ちで手を伸べている。

「ああ間違っていました」

と言って帰ってくれば、いつでも無条件にいられます。私はひとつも恨んでいない。そういう人たちのニコニコした写真なんかが残っている。

「どうしているのかな?」

と思う。そういう古い写真をひっくり返すと、私はそこで祈る。

2 あつき祈りを ひとりで祈り

十字架のもとで われは待つ

岩にせかるる 谷川の如



流れ流れて

会つときを

また会う時があらうと。

3 受けしみ恵

忘れておらじ

聖書^{みふみ}ひもとき

祈れかし

昔を今の

み霊^{たま}の愛よ！

いつか集会^{つどい}に

馳^はせて来よ

こういうのを読むと、ちよつと涙ぐむんで困る。

「ひねもす手をのべて招けり」

という。このあたりは実に懇ろに書いてある。6 節に、

6 視よこの事わが前にしるされたり。われ黙さずして報いかえすべし。必ず
かれらの懷中^{ふところ}に報いかえすべし。

という言葉がある。

8 エホバ如此^{かく}いたもう。人ぶどうのなかに汁あるを見ばいわん、これを
壊^{やぶ}るなかれ福祉^{さいわい}その中にあればなりと。我わが僕等のために如此おこないて
ことごとくは壊^{やぶ}らじ。9 ヤコブより一裔^{ひとつのすえ}をいだし、ユダよりわれ山々をうけ
つくべき者をいださん。わが撰^{えら}みたる者はこれをうけつぎ、我がしもべらは

彼処にすむべし。

ヤコブ、イスラエル、ユダ、あるいはエフライムという。同じ族をいろいろな名前と呼ん
でいる。「イスラエル」とは、

「神戦い給う、神勝ち給う」

というような意味です。「神の戦」と訳す人もいるけれども。「ヤコブより一裔をいだし」と
はキリストの預言になる。

10 シヤロンは羊のむれの牧場となり、アコルの谷はうしの群のふす所となり
て、我をたずねもとめたるわが民^{もの}の有とならん。

これは幸いの、恵まれた姿を言っている。「アコルの谷」とはヨルダンからエリコの方へ通
ずるところの谷です。エリコというのはヨルダンのずつと南の方です。

11 然どなんじらエホバを棄て、わがきよき山をわすれ、机をガド（禍福の神）
にそなえ、雑合^{まぜあわ}せたる酒をもりてメニ（運命の神）にささぐる者よ、12 われ汝
らを剣にわたすべく定めたり。なんじらは皆かがみて屠^{ほふ}らるべし。汝等はわ
が呼びしときこたえず、わが語りしとききかず、わが目にあしき事をおこない、
わが好まざりし事をえらみたればなり。

そんな偶像崇拜ではダメだと。預言書というのは、やはり非常にドラマチックな構造です。
光を語っているかと思うと、また闇のことを語っている。恵みを語っているかと思うと、
審判のことになる。それがドラマチックに展開していく。今読んだところはエホバの僕の



ことを歌っていると同時に、またエホバの敵のことを言っているわけです。

¹³ このゆえに主エホバかく言い給う、わが僕等はくらえども汝等はうえ、わが僕等はのめども汝等はかわき、我しもべらは喜べどもなんじらははじ、¹⁴ わが僕等はこころ楽しきによりて歌うたえども汝等はこころ哀きによりて叫び、また靈魂^{たましひ}うれうるによりて泣号^{なきさけ}ぶべし。¹⁵ なんじらが遺名^{のこすな}はわが撰^{えら}みたるものの呪詛^{のろい}の料とならん。主エホバなんじらを殺したまわん。然どおのれの僕等をほかの名をもて呼びたもうべし。

ここに「僕等^{しもべら}は」とたくさん書いてある。「ほかの名」というのは「新しい名」と同じことです。新しい恵みがくる。これが新天新地への序曲みたいな言葉です。

¹⁶ 斯るがゆえに地にありて己のために福祉^{さいわい}をねがうものは真実の神にむかいて福祉をもとめ、地にありて誓うものは真実の神をさして誓うべし。さきの困難^{なやみ}は忘れられてわが目よりかくれ失^{うせ}たるに因る。

「真実の神」とは、真理^{まこと}の神、アーメンの神、エメツの神ということ。誠^{まこと}というのは「言が成る」と書く。神の言は成る。観念ではありませんということです。「アーメン」というのは、

「然^{しか}あれ、そのように事実となってください」

という祈りの気持と、

「そのように事実となりました」

という恩恵の感謝の叫びとが、どちらも「アーメン」という言葉の中にある。今、現に「然^{しか}あり」ということと「然あれ」ということの両方をもっています。

●新天新地の大希望

¹⁷ 視よわれ新しき天とあたらしき地とを創造す。人さきのものを記念する

ことなく、之をその心におもい出^{いづ}ることなし。

新天新地がどんな姿で来るかということは誰も知らん。黙示録には出ています。けれども、黙示録はあの時にヨハネに示された啓示で――「黙示」というのは本当は「顕示」と訳すべきで、「顕らかに示す、被いを取る」という字です――それは一つの徴なんだ。徴はどのような現実として現れるか。それは神のみぞ知る。

こういう新天新地の大希望は神さまが示しているんです。我々が願っているのではない。イザヤ書と黙示録で神さまが示してくださっている大希望です。

召団讃歌 (A 34 「み霊の主イエスに」 (イザヤ 56、66) にも、

10 イザヤの預言は ひびきて新たに

ヨハネの黙示に 希望の花をば

咲かせて果てなき み国を現じて

み民に讃美の ハレルヤ挙げしむ



とある。これはこの8月10日の午後10時から12時にかけて作った讃美歌です。私はああいうものを作ったあとほとんど泣いている。それは悲しみの涙ではない。感激の天的な涙です。だから、私は天国にも涙があると言った。この地上の生涯は序曲にすぎない。プロローグ(序曲)です。エピソード(終曲)が待っている。

ブラウニングのエピソード、最期の辞世の詩は素晴らしい。

「私が逝くときには大歓喜をもつて送ってくれ。雲がかかるのは晴れることを信じ、善が善に勝たることなきを信じ、倒れるは必ず起きることを信じ、破れることは勝たんことを信じて、決して背を向けたことのない男が今行くのだから、大歓喜をもつて私を送ってくれ」

という熾んなる気持のブラウニングの詩です。テニソンの挽歌よりもブラウニングの方がはるかにその点は素晴らしい。

『アソランド』 跋詩(ブラウニング)

断じて背を向けしことなく

真向ひに突き進み、

むら雲の霽れゆくをつゆ疑はず、

正義の不況にも邪惡の勝利を

夢みしこと嘗てなく

倒るるは起たんがため、

挫折るは更に善く戦はんため、

眠るは醒めんがためと確く信ぜし者ぞ。

然り、真昼時、活動繁きたた中に、

去り逝く者を歓呼して送れよ！

向背は問うにや及ぶ、ただ命ぜよ前進を。

「敢闘！ 栄光！」と呼べ。また叫びてよ、

「勇躍、邁進、絶えず前進、

彼岸なほ 此岸の如く！」と。

ブライアントという詩人の「勝利の墓」という素晴らしい詩があります。

「或る独りの寂しき女の方が、しかし、独りで戦って行った」

という。

●新天新地を現在化

とにかく、希望は上から来ているので、願望は私たちの方からいくでしょうけれども、希望は別な仏教的な言葉でいうと「本願」なんだ。神さまがそのことを望んでいる。それが我々の希望となる。それが本当の希望なんだ。だから、希望は必ず成る。



聖書が表している信・望・愛というものがある。信はキリストの十字架・復活・聖霊の過去の恩寵を信じている。過去はもちろん直ちに現在になります。愛は常に現在のものです。「これから愛するよ」ではない、

「お前を愛しているよ。我汝を愛す」

ということ。信は過去、愛は現在、望は将来です。希望は上から将^{まさ}に來らんとしている。新天新地の終末的な希望というのはこのことを言うわけです。この将来はロマンチックに憧れているのではない。この将来が現在化する。

「神の国は汝らのうちに在り」

というのがこれです。キリストが将来を、新天新地を現在化している所が「神の国」です。というのは、キリストというひとはマタイ・マルコ・ルカ・ヨハネの福音書でこの新天新地の事態を、徴をもって現しているからです。盲者は目が見えるようになり、聾者は耳が聞こえるようになり、跛者は立ち、死人は甦る。キリストは驚くべきひとです。それは聖国の現実を既に徴で現した。キリストは、

『聖国の來たらんことを』と祈れ

と言うが、聖国は既に来てから祈れるんです。私たちはキリストの恩寵で聖国が来ているから祈れる。預言者イザヤはもうかなりその角度に來ている。新約にいけば、何といったって、キリストが來ているから、一番本ものです。この新天新地が現在化して、我々の胸三寸の中に投影しているから、希望は必ず成る。それが焦点なんです。将来の光がグーッと結んで、ここでもって火を發している。新天新地は、はるか彼方の、これから何千年後のことではない。いよいよ、質的には迫っている。そして、本当の内容として來ている。でなければ、

「聖國を來たらせたまえ」

なんて祈ったって、本当に來ていなければ、それは空念仏というものです。

「天国は近づきたり」

とキリストが言われたのは、キリストという天国が來ているから、

「お前たちの中にこうやって私が近づいているではないか。呼んでいるではないか」

ということです。全部、現在化する。過去の恩寵が現在化する。将来がまた現在化する。その世界が愛の世界です。

「そのうちの最も大なるものは愛なり」

という。愛は過去も将来も全部、永遠の現在において持っている。それは楽しい。

●幕屋の構造

17 視よわれ新しき天とあたらしき地とを創造す。人さき¹⁷のものを記念することなく、之をその心におもい出^{いづ}ることなし。



「新しき天とあたらしき地」という言葉は黙示録に出てくる。

「我また新しき天と新しき地とを見たり。これ前の天と前の地とは過ぎ去り、海も亦なきなり。我また聖なる都、新しきエルサレムの、夫のために飾りたる新婦のごとく準備して、神の許をいで、天より降るを見たり。また大いなる声の御座より出づるを聞けり。曰く『視よ、神の幕屋、人と偕にあり、神、人と偕に住み、人、神の民となり、神みずから人と偕に在して、かれらの目の涙をことごとく拭い去り給わん、今よりのち死もなく、悲歎も、号叫も、苦痛もなかるべし。前のもの既に過ぎ去りたればなり』」(黙示録 21・1～4)

とある。ここに「幕屋」という言葉が出ている。

「幕屋」

というのを最初に言いだしたのは実は私です。私は病床においてヒルティーの『眠られぬ夜のために』を読んでいて、彼が希望的な未来のことを語っているところを読んでいるときに、幕屋ということを示された。一番簡単な天幕の形は三角垂体です。

A B C (各個人) の三角形の底面に、神 (G) ・キリスト (X) の大黒柱 (垂線) がある。この天幕の中には聖霊が充滿している。

「二、三人わが名にありて集まる所には我もまたそこに在るなり」

という、キリストのこの言葉はエクレシアの一番元始的な姿です。

「神―キリスト―聖霊」

ときている。縦の綱の、G A ・G B ・G C の線は義の線です。そうすると、A B C の関係は三角関係ではない。これは三角でありながら円の中に入ってしまう。だから、縦の關係に平安があると、横の關係に平和がくる。縦の義のあるところに横の平和がくる。平和というのは愛がなければ平和でない。

「互いに相愛せよ」

という、その愛がないところに平和はない。それはまた歡喜の平和です。普通の「平和運動」とはおおよそ違う。だから、この幕屋構造が非常によく表していると思う。縦の線がなければ、本当の人格關係は成り立たない。横だけやっていると、

「あれがどうだ、これがどうだ」

なんて、下らないことを言い始める。けれども、

「地上はそのまま段々、天国になる」

とは聖書には書いてない。預言者たちはみなそうです。ミケランジェロは「最後の審判」を描いたが、審判を通る。神の義が通らないところに、愛の最後の世界は来ない。涙を流し血を流した、虐げられた人たちがたくさんある。黙示録 6 章で、

「なぜ復讐してくれませんか」

と、地上で不当な苦しみを受けた人達の悲痛な叫びがある。血が叫んでいる。



「アベルの血が叫んでいる」

という。誰にも同情されず、誰にも知られずに迫害されて死んでいった人たちがいくらもある。封建時代には随分ひどいことをやったらしい。あの封建時代の権力者なんてものはみな地獄へ入ってしまう。

●新天新地は現在化する

キリストに贖われた者は新しき霊体を着せられて、永遠の生命の世界に入れられる。新天新地を今、私たちはこの集会において現在化して行こうというわけです。もう私はそこに入ってしまったている。本当ですよ、楽しいという言葉もお表現できないような気持です。もう異言になりそうだ。私たちは新天新地人という。本当に「エン・クリスト」となると、新天新人になるわけです。この信と望と愛をもっている世界が「エン・クリスト」、

「われキリストのうちに、キリストわがうちに。我とキリストとは一つなり」

一如であるということです。ルターも、

「キリストと成る」

と言った。ペテロが、

「我を見よ」

と言った。「わがうちなるキリストを見よ」とは言わないで、「我を見よ」と言ったのは、みなそれは一如の世界だからです。キリストは、

「我と父とは一つなり」

と仰った。あれは一番簡単な節で、ギリシヤ語でたった三字です。一番深いことが一番簡単になる。

新天新地は現在化する。それを「終末的現在」という。終局史的終末と終末的現在と、その切っても切れない関係を現在化する。過去の恩寵を現在化し、将来の希望の事態を現在化する。存在そのものがそこで本当に過去・現在・未来を掌握してしまう。それが本当の永遠をもっているということになる。ただ漠然と永遠なんて言っているのではない。

ミルトンの『パラダイス・ロスト』の詩の中に、

「初めも終わりも中もただ讃美のみ」

という句がある。黙示録の言い方も、

「今在り、昔在り、後來たりたもう」

という。一番先に「今在り」と言っている。信仰は、

「信は即ち現なり」

という。

「分らないから信じておこう」

なんていうのは信仰でも何でもない。



「現在、^{うつつ}現として持つている」

ことを「信ずる」という。「信仰」という言葉はすぐ躓きになって困る。皆さん、あなた方は私の響きと一緒にグーッとその中に入っていますか。響きと同時に入っていないければダメです。私はその中から言っているのだから。

●喜び楽しむ

¹⁸然どなんじらわが創造する者によりて永遠にたのしみよろこべ。視よ、われはエルサレムを造りてよろこびとしその民を^{たのしみ}快樂とす。

「永遠にたのしみよろこべ」、遠慮するなど。ダンスをしたい時には、ダンスをして遊びなさいと。そこらの社交ダンスではないよ。御霊でもって本当に皆さんが肩を組んで喜んで一向差し支えない。そんなことは遠慮いらん。しょっちゅうそんなことをしてろなんて言っているのではないが、止むに止まれずしてする。

¹⁹われエルサレムを喜び、わが民をたのしまん。

第三イザヤでは「喜び楽しむ」という言葉がさんざん出てくる。ベートーベンの第九シンフォニーの第四楽章で、

「喜びが即ち火花だ」

という。あれはシラーの「喜びに寄す」という詩です。あのシラーの詩はいい。あれはシラーが故里を出て――お母さんを残して故里の門を出るときにシラーは後ろを向いて涙を流した――友人たちに迎えられた時に彼は本当にうれしかったから、その時に作った歌です。

而して泣声とさけぶ声とはふたびその中にきこえざるべし。

全く黙示録みたいなことが書いてある。

²⁰日数わずかにして死ぬる^{みどりこ}嬰兒といのちの日をみたさざる老人とはその中に

またあることなかるべし。

お釈迦さんが憂えたところの生病老死、お釈迦さんはそういった人生のはかなさを問題として、そして悟りの世界に入っていた。ヘブライの方は、人間のはかなさではなくて、悲しみ悩み苦しみ、罪の問題を中心とした苦しみが、これがユダヤ人です。もちろん、仏教にも煩惱の問題がありますから、ただ^{はかな}儚さばかりではありませんけれども。しかし、仏教の第一級の坊さんたちは素晴らしい。私は本当に尊敬しています。すべて乗り越えてしまっているから。

百歳にて死ぬるものも尚わかしとせられ、百歳にして死ぬるものを^{のろわ}詛れたる罪人とすべし。

これは参った。面白いことが書いてあるね。我々はそんなことをいわれなくても、罪びとだけでも。近頃は還暦なんていつても、60歳なんか大したことない。私は第二の還暦まで、



120歳まで生きなくては。地上の長短はそう問題ではありませんけれども、しかし、聖霊にあっては病がとつかない。

●御霊の実証

癲病院に行くと、普通は癲病患者との間には溝があつて、話す人と別れている。私は嫌だから、癲病人の中に入つて話したり、按手したりした。そうしたら、

「あなたみたいな人は初めてだ」

と言つて、院長さんがびつくりしてしまった。力がこちらから流れていくからね。御霊を受けない前の私なんていうものは、療養所へ行くと、肺病が伝染するかと思つて、手を洗つたり口をゆすいだりした。そんなことが全然なくなつてしまった。ペニシリン以前の療養所というのは、もういつ死ぬだろうかというような陰惨な空氣の所だった。けれども、幾人か、私の話と按手で治つてしまった。治るといふのはどの程度のことだか知らないけれども、とにかく、病院に居なくてよくなつて、外へ出て行つてどんどん働く。もう手術もできないような人がそうなつてしまった。

そういう意味においても、私は神さまに少し長生きさせていただかないといけない。

「御霊の力はかくのごときものだ」

と、御霊の実証をさせていただきます。普通の信仰は、

「私の信仰は」

と言つて、だんだん放物線を描いてダメになつてしまう。ところが、御霊の信仰は、自分を投げ捨てるから、逆に上りカーブになつていく。「わが信仰」といふのは、下がりカーブになつてしまう。

「私の信仰なんかありません、ただあなただけです」

というのは上昇カーブになる、放物線が逆カーブになる。あなた方は逆カーブにならないければダメだよ。

「外なる人は崩れるけれども、内なる人は日々に新たなり」

とパウロは言つた。霊体が内側から形成されていく。

「血氣の体あり、後に靈の体あり」

と、コリント前書15章にある。

だから、何歳で仆れようと、それはそこで死にはしない。永遠の生命です。新天新地を本当に内にもつている人は、既に永遠の生命をいただいている人です。私の兄貴は27歳で仆れた。しかし、彼は決して死んだのではない。もはや、年齢は問題でなくなる。一日即ち千年であります。

²¹かれら家をたてて之にすみ葡萄園をつくりてその果をくらうべし。²²かれらが建つるところにほかの人すまず、かれらが造るところの果はほかの人くら



わず、そはわが民のいのちは樹の命の如く、我がえらみたる者はその手の工^{わざ}ふるびうするとも存^{ながら}うべければなり。

この「工^{わざ}」は「亡びないわざ」という言い方なんです。また、朽ちない樹、生命の樹ということ。エデンの園に「生命の樹」というのがあった。生命の樹の実を食べていいけれども、「智慧の樹」の実を食べてはいかんというのに、智慧の樹の実を食べてしまった。生命の樹の実を食べれば良かったのに。間違えた。

● 自分自身を棄てろ

ユダヤの青年がキリストに、

「永遠の生命を得るにはどうしたらいいですか」

と問うた。彼らは「永遠の生命」を問題にして、観念的な真理を問題にしない。キリストが、

「モーセの律法を守っているか」

と。青年は「やっています」と。ところが、キリストは、

「けれども、お前はただ一つのことを欠く。有^もてる物をことごとく売って、貧

しき者に施せ。そして、我に従え」

と仰った。しかし、金持ちの息子だから、惜しくなって、すぐそこ逃げて行った。

我々は、

「自分はこれだ」

と思つて、知識を誇つたり、体力を誇つたり、権勢を誇つたり、富を誇つたりする。ということは結局、それにおいて自分を惜しんでいるということなんです。それを棄てろということは、

「己自身を棄てろ」

ということ。「富を棄てろ」ということは、

「自分自身を棄てろ。それに於て惜しんでいるお前そのものを棄てろ。そして私に

従え」

ということですよ。

それができないんだ。このキリストの言葉には私も落第する。だから、十字架に来ました。そうしたら、自分が棄てられていました。十字架の上で私というやつが葬られていた。古き我は、生来の我というものは十字架でもって片付いてしまっていた。皆さんは、まだ片付いていないのですか。片付いていなかったら、どうぞ、十字架で片付けてくださいよ。

「それでも、まだ」

なんて、自分を顧みているのは、片付かない証拠なんです。

内村鑑三なんていうのはわるい名前なんだ、日に三度鑑^{かんが}みるなんて。これは孔子の中にある言葉だ。三度鑑みてだんだん善くしようというのは道德の世界です。わるくはない。



それもやってください。しかし、そんなことではどうにもならないことです。とにかく、旧約を通じて新約に来るんですから、いきなり新約に来てしまつて、

「ああ、めでたし、めでたし」

と思つていると、ガタンと落ちたりする。わざわざ旧約に戻らなくていいけれども、新約を大いに受けとれば、その事態がわかります。

● 本当のところを持っているか

「小池先生はとにかく無教会を通じて、大学を出ていろいろな勉強して、そして最後に来ていることを私たちにぶちまけたつて、それは我々にはちよつと無理だ。我々にはすぐ来ない。やはり私たちもそこを通じていかなければ」

なんて。それは、一理はありますけれども、何も同じところを通る必要はない。一人ひとりにはみなそれぞれの路を歩いている。非常にゆつくりと回り道をする人もあるし、スーッと一直線に行く人もあるし、飛ぶがごとくに行つてしまう人もある。どれでもいい。問題は本当の世界に入ることだけです。カトリックでもプロテスタントでも無教会でも幕屋でも召団でも、どれでもいい。問題は、

「本当のところを持っているか、本ものか」

ということだけです。それぞれ使命がある、それぞれ在り方がある。結構です。しかしながら、

「十字架が本ものになつているか、聖霊が本ものであるか」

それだけが問題なんです。その点では、ルターや内村鑑三をなお突き抜けている世界です。しかし、若い人は内村先生のもものを読みなさいよ。あの文章は素晴らしい。あれだけの魂のこもった文章はちよつと他にない。あれに御霊の力がもつと入っていると、もの凄いいんだけれども。その点だけは惜しい。それはどうぞ、キリストの光で見てください。いかなるものもキリストの光で見てください。そうしたら、本当にそれを活かしてしまうから。

「どうして、こんなことになつたのだろうか」

と、自分でも不思議になる。向こうの芸術の第一級のもものを、福音を受けとらないで、評価しようとしたつて評価できない。

● 霊法人

「樹」の姿は私に真理を暗示してくれた。根の世界が宗教の世界なんです。幹は道德の世界で、枝葉花果は文化文明の世界です。

「宗教は文化の一つである」

と言う者が随分いるけれども、そうではない。宗教は文化文明の一つではない。これは絶対に根源の世界です。魂は絶対界に属している。



「万人これ宗教人なり」

と私ははつきり言います。日本人は宗教をいい加減にしている。大体、無宗教なんだ。

「あなたのところは何ですか」

「仏教です」

なんて。仏教と言ったって、それはお寺さんに最期にお経を読んでもらうような仏教だ。仏教が本当に生きていない。「南無阿弥陀仏」、「南無妙法蓮華經」が日常生活に生きていなければダメです。

カントが、

「これを思えば思つほど、またしばしばこれを念ずるほど、驚嘆するものが二つある。わが上なる星農の空とわが衷なる道德の法である」

と言った。『実践理性批判』の最後に出てくる有名な言葉です。カントは自然法則と道德法則に厳粛な畏敬の念を持った。道德のことを言おうとしたら、カントの『実践理性批判』を読まなければダメです。そういうものを大学生は読まなければいかん。

けれども、もうひとつ、靈法の世界がある。

「いのち生命の御靈みたまの法」

というのがある。パウロがローマ書 8 章 2 節で言っている靈法、靈の法則です。靈の法則に本当に乗つかつてしまっているのがキリストです。彼は靈法人です。

「活ける生命の御靈の法」

とは素晴らしい言葉です。それに対する畏敬のことは、カントはあそこでは言わなかった。惜しいなあと思う。「理性の限界内における宗教」なんていう論文を書いているから。彼の哲学はプロテスタント信仰から発していますけれども。

そういう樹です。私たち自身が樹なんだ。根は見えない。見えないけれども、根が無かつたら、この樹は枯れてしまう。種から一番先に出てくるのは根である。それから芽が出てくる。『宗教と現世』という本に内村先生が非常に農業のことも書いておられる。

「土と親しめ」

と。日本もまた畑を大いに作らなければならない時がくる。今から畑を作っておくといい。非常時に備えておく。

23 かれらの勤勞はたらきはむなしからず、その生むところの者はわざわいにかからず、彼等はエホバの福祉さいわいをたまひしものの裔こにしてその子輩こらもあい共におる可べれ
ばなり。24 かれらが呼ばざるさきにわれこたえ、彼らが語りおえざるに我われき
かん。25 豺狼おおかみとこひつじと食物をともにし、獅は牛のごとく藁わらをくらひ、蛇
はちりを糧かてとすべし。斯てわが聖山さきやまのいずこにても害そこなうことなく傷やぶることな
からん。これエホバの聖言みことばなり。



●天地両極を持つ

イザヤ書 66 章に入ります。

「エホバ如此^{かく}いいたもう。天はわが位、地はわが足台なり。これは使徒行伝 7 章に引用されている。

なんじら我がために如何なる家をたてんとするか。又いかなる処^{やすみ}かわが休憩^{やすみ}の場とならん。^{のたまわ}エホバ宣給く、我手はあらゆる此等のものを造りてこれらの物ことごとく成れり。

イザヤ書 40 章にも出ている。40 章は素晴らしい。カーライルが

「ヘブライ文学の白眉だ」

と言った。素晴らしい詩です。文語訳はいい。口語訳で預言書なんか読んだらダメです。今の若い人も文語をもう少し勉強しなさい。文語に、漢文調に親しむ。散文ではダメだ。普通の記事は散文でもいいけれども、預言や祈りになるとみな詩ですから。キリストの言葉はみな詩です。「山上の垂訓」は詩的な散文詩ですから。ちゃんと内的なリズムがある。

「詩は人類の最初の母語である」

というハーマンの言葉がある。

そういうように、万象は神さまの創造で造られた。内村先生の言葉の中に、

「私の教会堂は天が屋根で、床は草地である。鳥の声が伴奏している。いわゆる教会堂はいらない。至る所がこれ即ち教会堂、礼拝堂である。教会の建堂の献金なんか要らない。どこでも結構だ」

というような言葉がある。キリストも野原でしゃべったし、ガリラヤ湖畔でしゃべった。至る所これ即ち神の造りし神殿です。雄大なる大自然を即ち神殿としているわけです。そういう大きな捕らわれない気持ちになっていかないとね。

我はただ苦しみまた心をいたため我がことばを畏れおののくものを顧みるなりと。

これは大事な言葉の一つです。

「苦しむ者、心の砕けし者、我がことばを畏れおののくものを顧みるのである」
と。奢^{おご}れる者はダメだと。

「幸いなるかな、悲しむ者。その人は慰められん」

とある。みなキリストからくる慰めです。

ドイツ語で「同情する」という言葉は

「ミットライデン」「苦しみを共にする」

という言葉です。あれは「ジンパトス」というギリシア語からきている。共にしながら、それを喜びに変えてしまう。苦しみを楽しみに変えてしまう。ただ共にしているだけではいい。人間はただそこでいわゆる同情をするが、それを喜びに変えることができるのは聖



霊の世界なんです。痛みを痛みでなくしてしまふ。痛みに同情してそこに手を置けば、痛みを治してしまふ。熱があれば熱が下がったりする。

3 牛をほふるものは人をころす者のごとく、^{こひつじ}羔を犠牲とするものは^{いぬ}狗をくびりころす者のごとく、^{そなえもの}祭物をささぐるものは^{いのち}豚の血をささぐる者のごとく、香をたくものは偶像をほむる者のごとし。彼等はおのが途をえらみその心にくむべき者をたのしみとせり。

これは、いわゆる偶像的な世界に対するところの審判を言っているわけです。預言者は祭司宗教を——^{こひつじ}羔羊を犠牲にするのは祭司宗教の方です——それをも要らないことを言っている。

「我は^{いけにえ}犠牲よりも人を憐れむことを好むなり」

と、ホセア書 6 章にある。

「われは^{いつくしみ}愛情をよろこびて^{いけにえ}犠牲をよろこばず、神をしるを悦ぶこと^{はんさい}燔祭にまされり。」(ホセア 6:6)

とある。祭儀宗教に反対して、実存宗教に移れという。生活の中に行けと。けれども、キリスト自身がこの犠牲の羔羊となった。彼自身が祭儀宗教を全うしてしまった。「大祭司」と言われるのはそのことです。預言者宗教もどちらも全うした。キリストは大祭司であると同時に大預言者である。預言は上からくる言葉を伝え、祭司は人の願いを執成す。キリストはどちらもある。天地両極を持っている。本当の宗教は両極をもっています。

●神さまのつかみかかりに対してパツと応える

4 我もまた^{わざわい}災禍をえらびて彼等にあたえ、その^{おそ}懼るるところの事を彼らに臨ましめん。そは我よびしとき^{おそ}応うるものなく、我かたりしとき聴くことをせざりき。わが目にあしき事をおこない、わが好まざる事をえらみたればなり。

神さまが呼んでいるのに、やって来ない。語りし時に聞かない。聞けども聞こえずなんというのでは困る。

だから、集会は大事です。どうしても集会に出られないこともありますよ、それは仕方がない。けれども、その時は是非、聖書に向かってください。ご飯を食べない人はない。ご飯を食べて新聞を読む。ヒルティーは、

「朝起きたら直先に聖書を読んで、新聞を読むな」

と言っている。朝に夜に聖書を開くことが——お務めではない——ざるを得ないということになる。

「私は聖書を開かざるを得ません」

という人になったら、これはだんだん本ものになってくる。聖書に親しむ。何しろ、親しんで楽しくならないければ本ものにならない。始めは努めたっていいよ、仕方がないから。



苦しいところもあったたつていい。しかし、それが楽しみに変わらないうちは本ものにならない。内村先生が、

「伝道は私の趣味だ」

なんて言ったことがある。趣味のように楽しくなる。パウロは、

「私は止むにやまれずして語っている。止むを得ざるなり」

と言った。

神さまのつかみかかり、呼びかけに対しては、何はおいでもパツとそれに応える。

「それでも、こうです」

なんて言わない。ルカ伝14章で——キリストは饗宴に招くことが好きだから——みなを饗宴に招いたら、

「私は結婚するのでちよつと行けない」

とか、

「田地や牛がどうのこうの」

とか、何とかかんとかいろいろな理屈を言つて5、6人の者が断つた。

「御国の子らはかく断る。選ばれた者だと思つたが、お前たちはダメではないか。異邦人を、^{まがき}籬の外からいろいろな人を呼び集めて入れてしまふぞ。天国はかくの如きもので、その時に嘆き^{はがみ}切歯しても遅いぞ。いわゆる自分はアブラハムの子だと言つてただ血統を誇つていたつてダメだぞ」

とキリストは言っているわけです。

「霊のアブラハムの子となれ」

ということですよ。本当のことをはつきり言うものだから、キリストはユダヤ人に憎まれる。ユダヤ人中のユダヤ人をユダヤ人が迫害して十字架に架けてしまったんだ。

キリストのつかみかかり、御声には、そこらここらを思わず飛び込んでいけば、後で全部、キリストは満たしてくれる。

「我よりも何々を愛する者は我にふさわしからず。みな棄てろ」

と。ああいうことを言うものだから、

「キリスト教は危険思想だ」

と明治の頃の孔子の道徳の方から言われた。危険思想ではない。

「絶対なるものを本当に受けとれば、相対界をお前が今度は逆に愛して救つていくことになるぞ。棄てたものは、逆に本当にこれを救つてしまふぞ」

という、驚くべき構造になっている。その奥が読めてないから、誤解される。

●永遠の乳房

7 シオンは産^{うみ}のなやみを知らざるさきに生み、その苦^{くるしみ}勞きたらざるさきに



男子をうみいだせり。⁸ 誰がかかる事をききしや、誰がかかる類をみしや。

これはお産のことに例えている。神さまの素晴らしい助けが、苦しみなくして産むことになる。

一つの国はただ一日のくるしみにて成るべけんや。一つの国民は一時にうま
るべけんや。然どシオンはくるしむ間もなく直ちにその子輩をうめり。

「ローマは一日にしてならず」というのと同じような言葉だ。しかし、

「二日で成つてしまふぞ、一時で生まれてしまふぞ、驚くべき恩寵がくるぞ」ということです。

聖霊を、キリストを受けると、ガラリ変わる。一晩でもつてひっくり返る。神さまの驚くべき恵みの事態がここに言われている。ある期間を要することも真理です。ところが、ある一点においてバツとそこにくだつてくるのも真理なんです。

私が「無」というのは、決して「無い」ということではない。この「無」というのは非常にいろいろな内容をもっています。

⁹ エホバ言給く、われ産にのぞましめしに何でうまざらしめんや。なんじの神いいたまわく、我はうましむる者なるにいかで胎をとぎさんや。

¹⁰ エルサレムを愛するものよ、皆かれとともに喜べ、かれの故をもて楽しめ。彼のために悲しめるものよ、皆かれとともに喜びたのしめ。

「喜びたのしめ」という言葉がたくさん出てくる。

¹¹ そはなんじら乳をすう如くエルサレムの安慰をうけて飽くことを得ん。また乳をしぼることくその豊かなる栄えをうけておのずから心さわやかならん。

ここに「乳」という言葉がでてくる。

「慰めを与えるエルサレムの乳房から乳を吸え」

というのが原文の訳です。ここで想いだすのは、賀川豊彦の

『永遠の乳房』

という詩です。「母」という字は乳房の形からできている。漢字は世界最高の文字だ。

¹² エホバ如此いいたもう。視よ、われ河のごとく彼に平康をあたえ、漲ぎる

流れのごとく彼にもろもろの国の栄えをあたえん。而して汝等これをすい、

背におわれ膝におかれて楽しむべし。

「神さまの懐に入りなさい、聖霊の乳房から聖霊の乳を飲みなさい」

というようなわけだ。

¹³ 母の子をなぐさむることく我もなんじらを慰めん。なんじらはエルサレムにて安慰をうべし。

「慰め、慰め」と書いてある。パウロも「慰めの書翰」といわれる。ピリピ書に書いている。

¹⁴ なんじら見て心よろこばん。なんじらの骨は若草のさかゆるごとくなるべ



し。エホバの手はその僕等にあらわれ、又その仇をはげしく怒りたまわん。
真清水と温泉のことを歌っている「二つの泉」という詩がある。「自然の乳房」という言
い方はシラーも、特にゲーテはよく使っている。

「自然の母の乳房より、そこに流るる泉あり。
たとえば花の乙女子のやがて優しき母となり、
その嬰兒の唇を潤すさまに似たるかな。

ひとつは澄みて冷やかに谷の間にほとばしり、
葉を重ねたる青草の茂みのうちを流れけり。

これは真清水、岩清水のこと。

ひとつは泉あたたかに、その色暗く濁りいで、
響きは神の鳴るごとく岩の蔭に流れあふれけり。
これは温泉、熱泉のことです。

幸は、暑さに疲れはて、渴き悲しむ人にあれ。

ああ、木の蔭の草深く澄める泉を飲みほして

自然のうちに湧きいづる清き生命を汲ましめよ。

幸は、望みの薄くして、思い悩める人にあれ。

ああ、夕風のきたるとき、熱き泉に歩みきて

自然のうちに迸る奇しき力を知らしめよ。

岩と岩との谷の蔭、砂と砂との山の端を

緑の草の生いいでて、花咲く園となすまでは

溢れいでつつ昼も夜も、絶えぬ泉と知るや旅人。」

これは誰の詩だったかね。日本は火山国だから、至る所に温泉もある。私たち日本人は、
この火山国の火に心えて、聖霊の火をいただいて、熱泉の如くに生命の血を泉するような
魂でありたいわけです。

●全世界の民を天のエルサレムに招く

15 視よ、エホバは火の中にあらわれて来りたまう。その車輦ははやちのご
とし。烈しき威勢をもてその怒りをもらし、火のほのおをもてその譴をほど
こし給わん。

こういう時に「火」というのはみな霊火、火のことです。それは審判の火であると共に恩恵の
火ですから、その両面がでてくる。

16 エホバは火をもて剣をもてよろずの人を刑いたまわん。エホバに刺し殺さ
るるもの多かるべし。17 エホバ宣給く、みずからを潔くしみずからを別かち
て園にゆき、その中にある木の像にしたがい、豕の肉けがれたる物および鼠



をくらう者はみな共にたえうせん。

18 我かれらの^{わざ}作爲とかれらの^{おもひ}思念とをしれり。時きたらばもろもろの^{くにびと}国民ともろもろの^{やから}族とをあつめん。彼等きたりてわが栄光をみるべし。

新しきエルサレムのことです。

19 我かれらのなかに一つの^{しるし}休徴をたてて、逃れたる者をもろもろの国すなわち、タルシシ、よく弓をひくプル、ルデおよびトバル、ヤワン又わが^{きこえ}声名をきかずわが栄光をみざる遙かなる^{しましま}諸島につかわさん。彼等はわが栄光をもろもろの国にのべつたうべし。

全世界にそれを持って行くということです。もうユダヤ民族でなくて、全世界の民を天のエルサレムに招くという、黙示録に通ずるところの事態が最後に歌われているわけです。

20 エホバいい給う、かれらはイスラエルの子輩がきよき器にそなえものをもりてエホバの家にあずさえきたるが如く、なんじらの兄弟をもろもろの国の中よりたずさえて馬、車、^{かじ}轎、^ら騾、^{らくだ}駱駝にのらしめ、わが^{きよきやま}聖山エルサレムにきたらせてエホバの^{そなえもの}祭物とすべし。21 エホバいい給う、我また彼等のうちより人をえらびて祭司とレビ人とせんと。

22 エホバ^{のたまわ}宣給く、わが造らんとする新しき天とあたらしき地とわが前にながくとどまる如く、なんじの^{すえ}裔となんじの名はながくとどまらん。23 エホバいい給う、新月ごとに安息日ごとによろずの人わが前にきたりて^{おがみ}崇拜をなさん。

その先は余計なことになっています。そんなものは有ったって無くたっていい。

24 かれら^{いで}出てわれに^{そむ}逆きたる人の^{かばね}屍をみん。その^{うじ}蛆しなずその火きえず、よろずの人に^いみきらわるべし。

旧約の世界だから、旧約の限界は多少はあります。けれども、新天新地の事態は新約の黙示録にずうつとこれが反映されて、もつと大きく出てくる。

●新天新地を己のうちに持つ

今度は黙示録 19 章を開いてください。

「3 また再び言う『ハレルヤ、彼の焼かるる煙は世々限りなく立ち昇るなり』
4 ここに二十四人の長老と四つの^{いきもの}活物と平伏して御座^{みくら}に坐したもう神を拝し
『アメン、ハレルヤ』と言えり。5 また御座より声出で言う『すべて神の僕たるもの、神を畏るる者よ、小なるも大なるも、我らの神を讃め奉れ』
6 われ大いなる群衆の声おおくの水の音のごとく、^{いかづち}烈しき雷霆の声の如きものを聞けり。曰く『ハレルヤ、全能の主、われらの神は^{すべし}統治すなり、7 われら喜び樂しみて之に栄光を帰し奉らん。そは^{こひつじ}羔羊の婚姻の期^{とき}いたり、既にそ



の新婦みずから準備したればなり。⁸ 彼は輝ける潔き細布を着ることを許されたり、此の細布は聖徒たちの正しき行為なり^{おこなひ}』

⁹ 御使また我に言う『なんじ書き記せ、羔羊の婚姻の宴席に招かれたる者は幸福なり^{さいわい}』と。また我に言う『これ神の真の言なり』¹⁰ 我その足下に平伏して拝せんとしたれば、彼われに言う『慎みて然すな、我は汝およびイエスの証を保つ汝の兄弟とともに僕たるなり。なんじ神を拝せよ、イエスの証は即ち預言の霊なり』(黙示録 19・3-10)

このようにして、最後の祝福の歓喜は婚姻という形でもって、キリストの花嫁として、キリストを信ずるあらゆる国の人、またあらゆる時代の人がそこに招かれるという、非常に祝福された輝かしい光景を歌っている。だから、「喜び樂しめ」という。それを人生の一番の「高潮の時」——婚姻のことをドイツ語で「ホーホツアイト」という——婚姻をもつて象徴している。キリストは非常に豊かな気持の方です。

「喜び樂しめ、大いに神を讚美せよ」

と。そこではもはや、悲しみも苦しみも、そういった涙もない。この世の悩みや苦しみの中で、そういう天的な新天新地を、新天新地の喜び樂しみを本当にうちにもつことが大事です。どんなことに遭つても、微笑んでいるような人、笑うことのできる人は、

「あの人はあんなに苦しんでいるのに、なぜあんな笑顔をしているんだろう」

と思われるような悲痛な顔でなくなる。それは本当にこの新天新地を現在化して、御国をうちに持っているからです。

私たちは今この地上の相對界において絶対的な新天新地を己のうちに持つことが大事です。また、それを持つていれば、我々の間にそれが出てくる。それが本当の兄弟姉妹ということです。地上にはいろいろな関係があります、地上的な秩序と関係が。しかし、それよりももっと高い意味で、

「私たちは兄弟姉妹である」

ということ、それが新天新地の質なんです、現実なんです。それがキリストが言われた、「互いに相愛せよ^{あい}」

ということです。愛せざるを得ない。キリストの愛が流れてくる。互いに担つていく。担いの態勢です。愛するとは他者を担うこと、助けること、救うことです。

●永遠の女性

ゲーテが『ファウスト』という大詩の最後にそのことを象徴的に歌っている。私の著作集第二巻『芸術の魂』の「永遠の女性」という論文の中にも書きましたが、次の句がある。

Alles Vergängliche

Ist nur ein Gleichnis;



Das Unzulängliche,

Hier wirds Ereignis;

Das Unbeschreibliche,

Hier ist's getan;

Das Ewig-Weibliche

Zieht uns hinan.

「過ぎゆくものはすべて

映像にすぎず。

満ち足りざりしもの

ここに出現し、

「ここに」というのは新天新地の世界に於てということ、それをゲートは歌っている。

名状しがたきもの

ここに成就せり。

その名状しがたきものが新天新地では成就したと。

永遠の女性

われらを引きあぐ。」

母なるもの、「永遠の女性的なるもの」が私たちを引き上げていく。最後に新天新地で、今、地上において満たされざるものが本当に満ち円現し、名状しがたきものがここで成就する。欠けたるものはここで満つる。三日月は満月となる。パウロが言っている、

「栄光より栄光に進み、ついにキリストの姿に化するなり」

ということ。一人ひとりがそれぞれの特色を持ちながら、キリストの姿に化する。福音はそれだけの完成の約束をしている。我々が化するのではない。化せしめられていくんです。「人生観」なんていうことで言い切れないような素晴らしいことをこの福音が告げている。この偉大なる最後の日を思うと、宗派根性なんかはみなすつ飛んでいってしまう。そこに魂の腰をすえて、^{いかり}碇をおろす。

「星に車をつなげ」

とエマーソンが言っただけども。

ゲートは「太陽の子」(ゾンネンキント)なんです。昼の12時が鳴った時に彼は生まれた。日本人はみな太陽の子なんだ。国旗をうちにもっている。国粹主義でも何でもない。これは世界主義なんです。太陽がなくて地球があるか、というわけだ。地球を有りて在らしめるものは太陽だ。我々を有りて在らしめるものは神さまである、キリストである。有るこ

とが在らしめるのを恵みという。

ゲートの『ファウスト』は「ディ・ゾンネ」(太陽)から始まっている。

「太陽は昔の響きをもって動いている」



から始まっていて、ゲーテは最後の句を、

「永遠の女性われらを引きあぐ」

で終わっているから、「ゲーテさん、それではちょっと足りないよ」というわけで、私は、

Mit Lieb' und Wonne

Zur heiligen Sonne !

「愛と歓びをもって

聖なる太陽へ！」

という句を付け加えた。こんなものを付け加えたのは世界で私だけだ。恐らくゲーテは「そうだ」と言っ、天上で苦笑しているでしょう。

「神聖なる太陽」とは神さまのことです。「永遠の女性」が愛と歓喜をもって神・キリストへと引き上げていく。

歴史をつくるものは女性だから、女の方はしつかりしてください。男は悪いことばかりしている。天国では女性上位だ。何と言ったって、女性は愛の象徴だから。キリストは両方持っている。本当の人間は、「永遠に人間的なるもの」は「永遠に男性的なるもの」と「永遠に女性的なるもの」が両方ある。「永遠に神的なるもの」がどっちでも造る。

ダンテの詩はみな「星」(ステレ)という言葉で終わっている。「地獄篇」も「煉獄篇」も「天国篇」もみな星という字で終わっている。ダンテは冥想の詩人、夜型だ。ゲーテは太陽の詩人だ。だから、ゲーテとダンテを両方共ものにするとうエライことになる。昼も夜もどっちもつかむ。直観と冥想ということ。ゲーテがなぜ観念でなかったかという、直観の人だからです。よくものを観る人です。グーッとその中に入っ、ものを内観する。ゲーテの認識はそこから始まっている。そして、ゲーテの認識の仕方は自然と一つになる。ただ主観でも客観でもない。一如の見方をする。偉大な芸術家は大体そうだ。ダンテも勿論よくものを見えています。けれども、彼は冥想型なんだ。ベアトリーチェという恋人が向こう側に行っ、しまっているから。

私はこういう讃美歌をつくった。

召団讃歌 A 28 「ベタニヤなるある女」(1981 年 8 月 15 日作、アイルランド民謡「庭の千草」)

1 ベタニヤなる ある女

アラバストロン うち割りて

石膏壺を 心こめて

主の首に 注ぎけり

2 主の弟子どもは これを見て

もつたい 憤る

勿体なやと

「それを売りて 貧者のため

施しごとを なすべきに」



3 主は言い給う 「この女

葬りの為 わがために

涙ながら 注ぎたるぞ

我はほどなく 別れ往く

4 まことに告げん 全世界

いづこなりとも 福音の

伝えらるる ところにては

憶えらるべし この女！」

召団讃歌 A 34 「み霊の主イエスに」 (1981 年 8 月 10 日作)

——イザヤ書 56、66 章—— (讃美歌 537 「わが主のみ前に」の曲で)

1 み霊の主イエスに深く祈り入る

悲しみにかえて 歓喜の油

憂いの心に 讃美の衣を

与えてやまざる われらの義の主よ

2 願わくは汝 み空を裂きてぞ

天降りし給いて 汝が義のみ霊を

霰と降りしめ 枯葉にも似たる

われらの空しき 義を吹き飛ばせよ

3 日の本の国の 義朝日の如く

大和民族の 救い松火と

燃えて輝くまで われらはみ霊の

炎をともして 休むことあらじ

4 われらキリストを 大いに喜び

われらの魂 主をたのしみとす

新郎が新婦を よろこぶが如く

キリスト我らを 喜び給うぞ

5 主イエスのみ霊は わがうちに来たり

われらは福音を 語らざるを得ず

たましひを救い 心の呻きを

からだの痛手を 鎮めしめ給う

6 われは独りにて 酒槽を踏めり

主キリストのみは 我を知り給う

主の義のゆえにぞ 憤りたれど



● 起きよ日本

藤井武先生の文章を少し皆さんに紹介しましょう。

「日本がそれによって自ら更生しましたそれをもって世界を照らすべき光、それは何であるか。戦争か政治か芸術か哲学か。否、いかなる国も単にこれらのものによって新しき生命を獲得し、または人類理想の実現のための指導者となることはできない。神の国の建設は何よりもまず信仰にまたねばならぬ。世界歴史の主潮流は世の光なるキリストによって動く。科学ではない、経済ではない、武力ではない。宗教である。仏教ではない、イスラム教ではない。キリスト教である。否、キリスト彼ご自身である。唯一の道なる真理なる生命なるキリスト、万民の救主なるキリスト彼自身である。日本がもし自ら新しき生命に更生し、しかしてまた、世界を更生せしめんと欲するならば、日本は必ずキリストを迎えねばならぬ。日本の光明はキリストである。起きよ、起きよ、日本。光を放て、日本。今こそ汝の夜は明けたのである(イザヤ書 60 章)。黎明は汝に臨んだのである。……」

今は確かにキリスト教の一転機である。四百年前の宗教改革の欠陥はようやく日本に明白に認識されんとする。遠からずして必ずや第二の、しかして恐らくは最後の宗教改革が起こらなければならない。西洋人のついに成就すること能はざりしものをい

救贖あがないの故に 黙もだして荷になえり

7 いつわりなき子ら 汝らわが民！

われに祈り入れ われに帰り入れ！

わが愛の腕かひな 抱いだきて荷になわん

み霊みたまの力は 汝なれらに溢あふれん

8 天あめなるみ国の 幻うつつの中に

第三イザヤの 見たるは何ぞや

み霊に満ちたる 永遠とこしえの乳房ちのち

父なるみ神の 恵しるしみの徴しるしぞ

9 汝は我らの 衷うちなるみ神よ

我らは汝の 衷うちなるみ民よ

天地を新たに 創造つくり給たまう主よ

百年ももこせ生くるも 永遠ひとこの一日

10 イザヤの預言は ひびきて新たに

ヨハネの黙示に 希望の花をば

咲かせて果てなき 天国を現じて

み民に讃美の ハレルヤ挙げしむ

づれかの東洋国民が完成せねばならぬ。しかして、万国の民に新しき生命を供給せねばならぬ。もとより日本のキリスト教はなお言つに足らぬほど微弱であるのみならず、大体において極めて浅薄である。それは西洋のキリスト教の浅薄なるよりも更に浅薄である。しかしながら、我らは知る。教会の気付かぬ所に、職業的宗教家の触れない所に、選ばれたる少数の若き日本人の群の中に聖書が深く根をおろしつつあることを。キリストの精神(キリストの霊)が確実に大和魂を捕らえつつあることを。……

この時のために日本は立てられたのである。我らの祖先はこの日を見んとして楽しみ待ったのである。今にしても日本がその貴き使命を空しうすることあらんか、全ての日本人は生まれ出なかつた方が良かったのである。……

けだし、日本は最後の指導者となるであろう。しかして、四百年前の改革のときにドイツに従わざる国々はみな衰退したように、来るべき日においてもまた日本に字はざる国と民とは荒れ廢るであろう。」

エライことを預言しているね。これは先生が日本に期待するところの激しい言葉です。我々はその先生の祈りに応えたいと思います。けれども、栄光の日本を夢みていながら、幻滅の日本のこともまた書いています。「日本よ滅びよ」なんていう詩を書いた。

「昼は日ふたたびなんじの光とならず、月も輝きてなんじを照さず、エホバ永遠になんじの光となり、なんじの神はなんじの栄えとなり給わん。なんじの日はふたたび落^いず、なんじの月はかくることなかるべし。そはエホバ永遠になんじの光となり。汝のかなしみの日^{おわ}畢るべければなり。」(イザヤ60・19、20)

これと同じことは黙示録に書いてある。

「**都は日月の照らすを要せず、神の栄光これを照らし、羔羊はその燈火なり。**」

(黙示録21・23)

これはイザヤ書に込えているわけです。

そういうことで、イザヤ書というのは大変なものです。どうぞ、何回も繰り返して身につけてください。なお、内村鑑三先生の『日本の天職』と題した文章があります。一々読みませんが、内村先生、藤井先生は、その意味において、福音にあつてキリストの故に日本に望みをかけておられた。しかれば、このキリストの直弟子のこの次元に私たちは進んでいく。私たちは内村鑑三、藤井武のこの悲願と共に、本当に御霊のスクラムを組んで行きたいと思います。

● 祈り

祈ります。主イエス・キリストの父なるおん神さま。私たちの全身はあなたの御言、御霊の喜びと生命と光と愛に満ちあふれ、言うべきことを知りません。ありがとうございます。



こんな夏の集会は初めてのようであります。この梅ヶ島の山奥をあなたのみ懐として私たちはこの三日間、本当に一日を百年のごとき気持で送りました。勿体なくてしょうがなかったです。このようにして塵芥を離れて自然界の中に入れられ、新天新地の境地に入れてくださり、私たちはこれを身につけて、山をくだって行きます。本当にこの集まった兄弟姉妹たちの一人びとりの全身に溢れるすべてのものを知っておられ、またこれを包み、これをまた担い、ありがとうございます。

勝ちました。主さま、あなたのご勝利、聖名を讃え奉ります。「我すでに世に勝てり。汝ら、雄々しかれ」と。あなたのみ力によつて雄々しくいきます。

ああ、主さま、あなたはなんという方ですか。本当にもはや言語に絶します。キリストさま、主さま、一人びとりの中に完全にあなたは占領してくださり、

「われは汝のうちに、汝はわがうちに」

と。「エン・クリスト」、ありがとうございます。

「われは汝なり、汝はわれなり」

とまで迫ってください。ありがとうございます。この一如の世界をいよいよ身につけて、この使徒たちの信仰の次元を本当に一人びとりがその人その人らしき姿をもって、神さま、いよいよ完成してください。それが大調和となり、大ハーモニーとなつて、全部これ讚美であります。始めより終りに至るまで、讚美、讚美。光より光へ、力より力へと、ありがとうございます。詩篇 84 篇にもありましたとおり、

「各々シオンに到りて、神にまみゆ」

と。主さま、私たちは本当にそれぞれの路をあい携えながら行きながら、そして、天界においてまた集う日のくることを想つて、本当になんともいえない大希望に満たされました。

かくして、本当に地上のいかなる患難も乗り切ることができます。天界が来ているからです。既にあなたが私たちの中でそのような終末の世界を、新天新地を開いてくださっているから、ただ聖名を讃え奉ります。イザヤ書の終り、黙示録の終りが旧約・新約あい応えて、驚くべき消息を伝えてくださっておりありがとうございます。私たちは本当に毎日のご飯よりも聖書を本当に糧とし、

「我をくらえ、我を飲め」

との、あなたをくらい、あなたを飲んで進んで行きます。断食はそのためであります。かくして、私たちは何をするにもみな、聖名にあつて聖名のゆえに聖名のためです。ありがとうございます。

ああ、主さまのあなた愛がかくして貫き、私たちが本当にもう喜び勇んで進んで行きます。今、この五回のあなたの御霊・御言による集会を平伏して感謝し、主イエス・キリストの聖名にあつて、聖名を讃えつつ捧げ奉ります。アーメン。

